積層する風景

―歴史的重層性を顕在化させ、パブリックライフを育む歴史シンボル通りの提案―

BR14090　宮川慎一朗
指導教員　鈴木俊治

1.　研究の背景と目的

近代の機能主義的な都市計画の影響により、多くの都市の公共空間における人々の滞留型の活動（以下パブリックライフとする。）が減少しているが、近年ではパブリックライフを増進し、健康的かつ楽しい生活を送ることへの関心が高まっている。

本研究では、2017 年 5 月に行われた「パブリックライフ調査 in 金沢」を予備調査とし、8 月・10 月・12 月に行った本調査と合わせて金沢市の中心地である広坂における人々のパブリックライフを分析する。更にその成果を活かし、広坂の歴史的建造物と現代建築が織り成す歴史的重層性を顕在化し、豊かなパブリックライフを創出する空間を提案する。

2.　対象地　―石川県金沢市広坂―

金沢は江戸時代に加賀百万石の城下町として栄えていた。金沢の中心部である広坂には伝統的な資産から現代的な建物まで、地域独自の歴史が今日に至るまで重層的に残されている。近年北陸新幹線開通に伴い観光客数が急増しており、将来的には多くの人が広坂を訪れることが見込まれている。

図 1.　調査・設計対象地及び主な建築用途図

3.　予備調査

広坂とその西側の香林坊の一部地区を対象に行った調査であり、5 月 20 日（土）に 10 時・12 時・15 時台の 10 分 ~15 分の 5 分間で調査員およそ 20 人が一斉に観察調査を行った。この調査によって対象地に滞留していた人々の属性とアクティビティを認識した。

図 2.　広坂と香林坊の一部地区における時間別滞留者の属性内訳図

図 3.　広坂と香林坊の一部地区における 15 時台の個人・グループ別アクティビティ内訳図

4.　本調査

4-A 調査 .　滞留者プロット調査

4-A 調査 -1.　調査方法

調査対象は滞留行動 (5 秒以上の停止行動) を行った全ての者とし、滞留行動が確認できた場所を男性を青、女性を赤で図面上にプロットした。対象地は図 1 の A-1~5 の 5 カ所とし、調査時間は 5 分とした。

4-A 調査 -2.　調査結果

図 4.　A-1 での滞留者プロット図　図 5.　A-2 での滞留者プロット図　図 6.　A-3 での滞留者プロット図

21 世紀美術館敷地内の A-3,A-4 はベンチやアートを中心に多くの人が滞留しているのに対し、A-1、A-2、A-5 では滞留者は少なかった。

図 7.　A 4 での滞留者プロット図　図 8.　A 5 での滞留者プロット図

4-B 調査 .　着座スペース単位の着座時間分布調査

4-B 調査 -1.　調査方法

調査は 21 世紀美術館の敷地内北西側 (図 1 の B) にて夏期と秋季の 2 回調査を実施した。調査時間は 30 分とした。結果を図 9、図 10 に示す。着座スペースごとに識別番号 (ID) を与え、棒線は 1 人がどの ID にどれ程の時間着座しているかを表す。

4-B 調査 -2.　調査結果

図 9.　夏季の着座スペース単位の着座時間分布図
調査日:8 月 3 日 (木)　湿度:61%
時間:14:30~15:00　総合計人数:15 人
天候：快晴　瞬間最高利用率約26%
気温:33℃

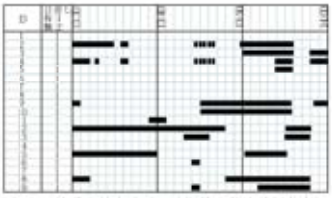

図 10.　秋季の着座スペース単位の着座時間分布図
調査日:10 月 7 日 (土)　湿度:63%
時間:13:30~14:00　総合計人数:37 人
天候：曇り　瞬間最高利用率約53%
気温:24℃

着座スペースの ID を図 11 に示す。ID の 1~7 番がアート作品であり、8~19 番がベンチである。ベンチは人の座る幅を 60 ㎝と仮定し幅 252 ㎝であるベンチを 4 分割した。

夏季はアート作品に座るが、ベンチには全く座らなかった。秋季はアート作品とベンチ共に多くの人が利用し、着座した総合計人数は夏期に比べ 2 倍以上であった。

図 11.　B 調査での ID 位置関係図

5. 調査まとめと問題提起

1. 調査対象地区内でも、ゾーンにより滞留者数に大きな差があり、都市空間の質が人の密度や行動に影響を与えている。(A 調査より)

2. 夏に芸術作品以外のベンチに人が着座せず、座るための快適な環境になっていない。(B 調査より)

3. 辰巳用水が広坂通りの中央分離帯内を流れている。したがって多くの観光客が認知していないと考えられ、親水空間になっていない。(観察より)

6. まちづくりコンセプト —3 つのつなぐ—

以上の調査を踏まえ、パブリックライフをより豊かにするため、次のコンセプトを設定した。

1. 人 × 歴史

広坂通りの車道を片道 3 車線から 2 車線に減らし、人々が歴史の積層を追想するオープンスペースを設ける。

2. 広坂 × 周辺地域

広坂を歩くことに魅力を感じられる空間とすることで、地域全体の歩行者数と回遊性を増し、アクティビティを促進する。

3. 過去 × 未来

歴史的な用水と、現代的な金沢用水記念館及び現代アートを核とする空間を共存させ、過去の風景を未来へ融合させる。

7. 街路断面のデザインコンセプト

南北 (短断面) 方向 : かつての金沢城惣構をモチーフとし、人を遮る場から滞留や回遊する場へ更新する。

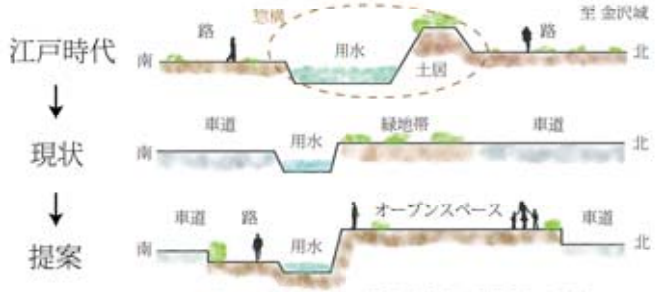

図 12. 断面デザインダイアグラム (南北方向の変遷)

東西 (軸線) 方向 : 周辺環境より、計画地の東側を歴史的地域、西側を現代的地域と解する。現代的になるにつれ、人工物によって歴史文化から物理的かつ心理的に離れていく様子を演出するが、西側の「金沢用水記念館」で歴史文化である用水と現代を融合させ、その価値を再確認する。

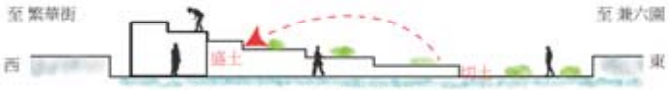

図 13. 断面デザインダイアグラム (東西方向)

8. 主な動線及び滞留計画

9. 全体計画

土地の基本空間構造

積み重なる歴史文化の層を表現する。人々に快適なレベル差やテクスチュアを施す。

植栽

低木が周囲の騒音を軽減し、高木が木漏れ日を生み出し安らぎを与える。主に既存樹木と在来種を利用する。

ファーニチュア及びアート

美術館のアート領域を対象地区内に浸透させ、人の流れとアクティビティを生み出す。

追想の展望台

周囲の歴史的遺産が現代アートと共存する様子を様々な角度から望み、追想する。

金沢用水記念館

上から覗くと建築内が用水に浸かっているように見える。壁面は二方面をディスプレイ化し、金沢の歴史遺産の情報を得る。

コミュニケーションユニット

人間同士のコミュニケーション距離と社会的境界を単位空間の基準とし、感覚を刺激することで交流を促す。

惣構メモリアル

建設当時の高さで一部復元する。人々は背後の金沢城と用水を感じとる。

10. 総括

この提案によって、ここを訪れる人々が都市に埋もれている歴史遺産について関心を抱き、未来に継承する。更に、多くの人がここで地域独自の豊かなパブリックライフを楽しむ空間となる。

【参考文献】

ヤン・ゲール、ピアギッテ・スヴィア (2016)『パブリックライフ学入門』鈴木俊治・高松誠治・武田重昭・中島直人 訳　ウィリアム・H・ホワイト (1980)『The social life of small urban spaces』

山出保 (2013)『金沢の気骨 - 文化でまちづくり』　ヤン・ゲール (2014)『人間の街 : 公共空間のデザイン』北原理雄 訳　本康 宏史 (2017)『古地図で楽しむ金沢』